第 61 回　いなばの白うさぎ

Ｉ Ｔ生

今でも教科書にのっている神話（おとぎ話）に、以前紹介した「やまたのおろち」と「いなばの白うさぎ」がある。

いなばの白うさぎは、鳥取市の砂丘（東西１６キロ）の西端にある、白兎海岸が舞台となっている。日本の国づくりを行ったとされる大国主命（大黒さん）が、サメに皮をはがれた白うさぎを救う話である。

ほのぼのとしたおとぎ話だが、その舞台となった白兎海岸は今は遠浅で白砂青松の風光明媚な場所で、夏は海水浴客でにぎわうが、その生成は苛烈を極めている。

今回添付した写真の奥にみえる小島が、白うさぎがいた場所とされ、サメをだまして海岸側に移ってくるのだが、この小島は、２０００万年前の火山活動で、ここまで飛んできた、火山灰や火山礫がふりつもってできたというのである。

いなばの白うさぎの舞台となった白兎海岸。奥の小島から、白うさぎがサメの背中をつたって海岸に着いたとされている

そもそも、山にいたはずの白うさぎがなぜ、沖合の小島にいたのか。これも洪水で流され、小島までたどりついたという話がある。以前紹介した「やまたのおろち」の話と同様、山陰の自然環境の厳しさをうかがわせる。砂丘も、日本海の風の厳しさと関係がある。白兎海岸の集落は、風と砂に襲われ、点々と移動をした記録も残る。

こうした、日本列島の自然環境の苛烈さと、そこで生き続けた知恵こそが、伝承されるべきであるが、教科書のおとぎ話「いなばの白うさぎ」は、大黒様が白うさぎを救って、おしまいである。やまたのおろちと同様、いまだに、教科書に残る数少ない神話だけに、もう少し、踏み込んだ学習がなされるべきでないかとも思う。

正しい知識で困窮者を救う現在の教科書の内容でも、今どきの政治家への教育にはもってこいとは思うが…。

（令和２年８月）